

第1章 古い狩人

(前)

1・1

(1)

蒸し暑さにうなされて、私はなかなか寝付けなかった。喉が渴く。発汗して蒸発していく水分量と、補給した量が明らかに釣り合っていない。何度も下に降りて、コップにほうじ茶を注いで、一気に

喉へ流し込む。食道には物体が自然に落ちていくわけではないという。冷蔵庫で綿密に冷やされたお茶に、更に氷を添加して、可能な限り冷却した液体は、食道を冷たさとともに這いずり、痛いぐらいに自己主張する。もはや飲み込むことから辛いほど、熱帯夜の最悪な時間帯。それを睡眠の彼方、意識の避暑地でやり過ぎることが出来ないのは、私にとって大きな精神的負担だった。もうすぐ夜の十時を回ろうとしている。どうしよう。今夜がもし、狩りの夢だとしたら。

精神的な沈みこみは、感覚的なそれに直結している。ベッドが堅く、けれど飲み込まれていく。硬質な箱の中に閉じ込められそうになるように。拘束具。降下

運動。ところが重力に囚われて、ベッドをすり抜けて落ちていきそう。トンネル効果。起こるはずもないが、しかし恐れもある。今日はこんなにも不安定だった。

儚い瞑想の中に、私は手足を拘束される。感覚が違う。いつもの没入感とは違う、追体験を強制されるような、催眠状態にあるような感覚だ。鋭いナイフが、私の衣服を切り裂いていく。なにかを隠していないか、それを限なく確認する。厳しい取り調べ。他人を受け入れようとしない、疑心暗鬼な心を感じる。この心は誰のものなのか。

その違和感を感じることは、私が狩りに慣れてきたという証拠かもしれない。

遠い先に光が見える。

気付けば、私は夢の中に居たようだった。長い流れを遡って、私は目を覚ます。

そこは大通りだった。駅西の長く幅の大きな道路。その割に、周囲の開発は進んでいない。かつての好景気が続けば、きっとこの場所にも多くのビルが立ち並ぶはずだったが、あつけなくその夢は潰えて、虚しい広々さが残るだけの場所。私の家の近所だ。少し目を凝らせば、駅も見えるだろう。疎らな電灯の、その一つに二人の人影が見える。私の待ち人。二人の狩人。私は、大きく手を振ることも考えたが、彼女たちの視線が私に向いていないことを察知した。互いに顔を背けあつて、手持ち無沙汰に空や地面に顔を向けている。

私は、少し早足で歩いた。

足音に感じて、二人は同一の方向に向き合った。一人は見知った顔、セレナ

のものだ。そしてもうひとりの顔、全く

知らない、しかしどこかで既視感のある情報を持った姿。長いポニーテールと両

端の房、濡鴉の靡く長髪は、どこか人形のような。意識してそうしているのか。

彼女の表情は動かない。どこか、あの時の女。私を眼前で見下した女、その雰囲気と似ているが、彼女はそれを完全に自

分のものにしていた。あまりにも孤独に慣れすぎて、そのものになってしまっ

ている。それが第一印象だった。

その解析後に、私はやっと思い出した。

彼女の髪型と言うか輪郭は、いつか見た

アヤメと口論していた女性そのものだ。

「あなたは……」

私は独り言つ。

まゆずみ
「黛エナ。よろしく、ね」

伝わっているのかを不安視する首の傾き。

彼女の性格は、まだはつきりしない。

「ああ、よろしくお願いします」

えっと、名前は——と言いかけると、

「セレナから聞いているから、大丈夫」

と返ってきた。どうやらセレナと先に情報

交換しあっていたようだ。

「カナンも来たから、行きましょうよ。

エナせ——さん」

それにしては、どうもセレナの彼女への

態度は、妙によそよそしかった。

少し歩くと言われて、私はエナの後に

続く。セレナは変わらず、彼女を見よう
としない。なぜだろう。緊張か不信か、
そのどちらでもないのか。その判断はで
きないが、私は、彼女のためにも、多く
のことを目の前の人間から引き出そうと
思った。

「エナさんは、前にも狩人をやってたん
ですよ」

「そうだね」

「アヤメさんと一緒に」

「そう……ね」

「強かったんですよ」

「まあ、そうかもしれない……」

「なんかすいません。偉そうに言っ

ても、私達——」

「不安がるのは理解できる。私も久しぶ

りだし。もう二度と狩人になる気はなかつ
た」

「そうなんですか。それは、災難？ で
すねよね」

「確かに災難。でも、私は求められるな
ら、答える義務がある。あなた達がまだ
強くなりきれないなら、サポートするだ
け」

「ありがとうございます。そう言ってくれ
て。私達も、がんばります」

「自惚れないでね。いつも気を引き締め

て」

「はい」

「そうじゃないと、アヤ——アヤメみ
たいになる」

アヤ、と親しく呼んだ彼女は、しかし躊

踏していた。彼女の事を、話したくない。私はそう感じ取った。

「エネさんは、どんな願いを叶えたんですか」

「願い？ ああ、対価のことね。——自分の生活」

「生活？」

「アパートの家賃だったり、電気代・ガス代・水道代諸々の生活費。それを全部、私がもうこれ以上いらないと思うまで」

「そんなこと、できるんですか」

「その分、働く期間は長いけどね。アオタも多分そんなこと言ってたと思うけど」

「どれ位やってたんですか」

「一年以上。高一の夏ぐらいから、二年の冬ぐらいまで」

「そんなに、長いんですか」

「高望みしなければ、いつでもやめられる。肝心なのは、何を叶えたいか。あなたは——」

「私は、アヤメさんの腕を、治したいんです」

前を向いていたエナは、不意に私の方に目をやった。ほんの僅かだが、その仕草は、まるで発言の源を確認する動作に見えた。本当に言っているのか、と。

「そう——優しいのね。あなたは」

「おかしいですか？」

「否定してるつもりはないよ。けど、私もアヤメも、自分のことしか頭になかった」

「私は、そうは思いません。アヤメさん

も、もちろんエナさんも誰かのために、何かをできる人です」

「あなたがそう思っているのなら、そのままにしておいて。ただ覚えておいてほしいの。私達は、決して綺麗な存在ではないということ。いずれ分かる。けれどそのときになっても、その心を大切にして。……ああ、辛気臭くなったね。さっきのは忘れてもいいから」

「いえ、大切にします。私は、誰かのために戦うべきなんです」

彼女は、うなずくだけだった。

そしてこの会話の中で、セレナは一度も声を発しなかった。それが、とても気がかりだった。彼女はなにか、抱えているものがあるのだろうか。私は、どこか

しらの疎外感を押し付けられているような感覚を覚える。二人に何かがあるのか。

だがそれは、詮索すべきではない。

(2)

電灯の下、垂直な光に照らされた、コントラストの激しい表面。私は、振り向いたエナの姿を初めて注視した。すっぽりと長い外套に包まれた体。その端々からは、かなり凝ったスーツのような服が見え隠れする。襟の部分は普段見るものと同じに見えるが、その下は、胸を大きく強調するような、かなり極端に短いジャケット、と言えるかはわからないが、そんな服を着ていた。しかし大胆な服装を、

結局はコートが隠しているし、第一目につくのは黒い手袋だ。厚さは薄く、ピツタリと肌に張り付いているように見えるが、その重厚感は計り知れない。柔らかいはずの手を、硬質な工具に変容させている。

多くの身体的な装飾に比べて、ただ顔を隠すものではなく、しかも目立たない。彼女の表情がそもそも、動かない彫像のようなもので、一般の風景に同化していた。なびく房はたゆたう草木で、目を細めがちな顔面は壁の染みだ。適切な喩えではないと思うが、私の印象はそうだった。どこか遠くに、自分の魂を飛ばしているような、影のなさ。このだっ広い歩道においても、彼女の存在感は電灯の

それと変わらなかった。

「ここで、何をするんですか」

私は聞いた。

「あなた達が今までどうやって狩りをしていたのかは、知らないけれど、多分、

同じよね」

「えっと、基本、追いかけてました。追いかけて、どっちかがへたるまで」

「……それ本当？ 根比べしてたってこと？」

「大きかったりしたら、また違う感じですよけど、普通はそうやってます」

「無駄ね」

「はあ……」

「追いかけるってことは、見つけないといけないってこと。こんな広い街の中で、

小さな点みみたいな悪夢を、どうやって見つけるの？」

「それは、三人に分かれて」

「風潰しに探すってことか……」

「でも、私達は悪夢の近くに目覚めるんですよ」

1・2

性的な感覚を感じるということは、自身の体温の変化である。人は絶えず体温を上昇させ続けている。絶えず下がっていく自らの熱を、保ち続けるためにだ。その永遠の作用の中に、温もりが介在すると、人は心理的な動悸を覚える。温も

りは実際、物質的な作用に依らないが、しかし多くの場合はそれに依拠している。肌が触れ合う、あるいは極限まで接近すること、それが温もりの伝達である。温もりが与えられ、その熱さ、あるいは冷たさに見を縮こまらせる行動原理。肌の温度と乖離した——熱さと冷たさのどちらか——驚くほどの温もりを得て、それに近づこうとする発汗や呼吸の乱れ、つまり、体温をその温もりと同化させようとする働きが、恋である。逆に、その温もりを排除して、本来の体温を取り戻そうとする働きが、嫌悪である。肌に触れる熱さに震え、冷たさに身を静止させて、自らの熱を捨てることができるのは、愛し合うことの動物的な側面であろう。

そして嫌悪すること、自らの領域を保全しようとする心理的な作用は、愛し合うことの人間的な側面だろう。

そのどちらにも一致しない行動。依存とは温もりを永遠に無へと還す諸作用のことである。肌に触れ続ける、或いは延々と粘膜の接触を維持し続けること。己の熱すらも忘れるほど、混じり続ける温もり。エントロピーの増大。煩雑さをまして、しかしその回復をしない。溜め込み続けるエントロピーは、いずれ熱的な死をもたらすように、依存によって癒着した肌、温もりは、いずれ両者の破滅的な最後をもたらすだろう。